

亡き祖父“^{うねめ}美国町出身 故 越野采女さん”を語る 実を結んだ“東京”への挑戦

創業103年、祖父から継いだ志

越野 ^{みつひろ}充博さん / ^{ゆうさく}有策さん（東京都北区在住）

東京都に明治45年創業の「^{こしの}越野建設株式会社」という総合建設会社がある。積丹町（旧美国町）出身者の故^{うねめ}越野采女さんは当時16歳の若さで高い志を抱き上京し、同社の前身である「畑野組」へ入社、創業から10年が経過した大正11年に二代目社長に就任。同社は二度の大戦、震災、バブル崩壊など幾多の苦難を乗り越え、今年、創業から103年を迎えた。

戦時中の激動の中、社長に就任、終戦後の日本の工業・重工業の飛躍的な発展とともに創業以来100年以上に亘って活躍する会社の礎を築いた祖父、^{みつひろ}越野采女さんについて7月中旬、東京都北区王子にある同社を訪ね、采女氏の孫・^{みつひろ}越野充博代表取締役社長（兄・56歳）と^{ゆうさく}越野有策取締役建設部長（弟・53歳）のお二人にお話を伺った。

— 越野家と采女さんの生い立ちを教えてください。

もともとは江戸の末期に加賀藩（現在の石川県）から鯨漁のために海を越えて美国町に渡ったのが采女の祖父である越野東四郎です。東四郎は網元としていぶん成功を収めたと聞いています。積丹町史にも東四郎の名前が載っています（積丹町史掲載の「慶応3年美国部落見取図」に東四郎さんの名が記載されている）、北海道庁の旧本庁舎に行つて出典の古文書のようなものも見せてもらったこともあります。その東四郎の子が東五郎と言ひまして、ちょうど先週（7月上旬）美国町にあるお墓にお参りに行かせていただいたんですが、その越野家累代の墓を建てたのがこの越野東五郎です。

そして、その東五郎の12人兄弟の子の長男として誕生したのが采女です。幼いころの詳しいことは残念ながら分かりませんが、16歳位で東京に出てきたと聞いています。

— 16歳で全く知らない土地に渡ったんですね…。

采女が上京したところというの

は、日露戦争が終わりを迎える頃で…、もしかしたら東京以上に北海道ではロシアが攻めてくるっていう意識は強かったんじゃないかなあつて思います。しかし、その大國ロシアを日本は打ち破つて、東京はそのことで沸き立っているという情報を耳にした采女は上京を決心したんじゃないかと思うんです。

そして、まさに当社が創業した明治45年頃から大正の初め頃に工業・重工業が発達しはじめ、この辺りにも工場が沢山出て来

って…。その明治から大正にかけての高度成長にあつた中で采女は土建業に身を投じていたんですね。おそらくは学問の心得があつた訳でもなかつたので、一生懸命仕事をして、どうにか食べていった。そしてそうやって修行する中で結婚をし、家庭を築いていったというわけですね。何年に入社したのかはわかりませんが、社長に就任したのは大正11年、36歳位の時ですよ、私達の感覚からしたら随分若いですよ。裸一貫で東京に出てきて何もないところから始めて、そのようなしつかりとした地位を築いていったというの

昭和37年正月、采女さんが会社を社長として引き継いだ三男淑郎さん（充博さん・有策さんの父）宅を訪れた際の写真を収めたアルバム。まだ幼かったお二人を抱き上げ、また、温かく見守る采女さん。



37. 1. 4.

は立派なことだなんて思いますよ。

— 上京後も積丹町とご縁があったと聞いています。

私達の父も含めて祖父の采女には息子が3人いたんですが、昭和20年の終戦後にはその3人に経営を委ね、昭和24・25年頃には美国に戻っているんですよ、教育委員長など務め、町のお仕事も手伝わせていただいていたようですね。昭和26年に飛行機が通うようになると夏は美国で過ごして、それ以外は東京で暮らすという暮らしをしていましたよ。

— 采女さんとの思い出を教えてください。

昭和43年からは半年美国、半年東京という暮らしを辞めて、東京ですつと暮らすようになったんですが、采女が亡くなったときには私（充博社長）が小学校4年生、弟（有策部長）が小学校2年生で本当に幼い時しか付き合うことが出来なかったの。直接何かを教わったという記憶はあまり無いんです。ただ、優しいおじいちゃんだったという印象だけは強く残っています。

— 采女さんの意志は会社にどのように伝わっていますか？

『お得意様の竈の灰まで掃除する心がけを持って』これが祖父から父へ、そして私たちへと三代にわたり受け継がれている言葉です。要するに竈の灰というのは煮炊きをしているうちに段々と溜まってきて、掃除をするのが億劫でやりたい仕事ではないわけです。お客様への感謝の気持ちを込め、お客様ご自身も気付いていない隅々まで目を配り、体を動かす『気遣い』の大切さを説いたこの言葉は、事あるごとに父から聞かされ、祖父や父の面影とともに私達の脳裏から離れることがありません。祖父と過ごした時間は長くはありませんでしたが、問わず語りに父を通して何度も聞いたこの言葉は私たちが仕事を行っていく上での規範として、胸に留めています。

— お二人（充博社長・有策部長）の積丹町での思い出を教えてください。

私（充博社長）は小学二年生の時に初めて積丹町に行きまし



越野有策
ゆうさく
取締役建設部長

越野充博
みつひろ
代表取締役社長

て、結局祖父が健在の時に伺ったのはその一回きりとなってしまいました。祖父の家には温泉みたいな大きな風呂があつて驚いた記憶がありますよ。弟は弟でバイクに乗って行ったりして、その後もそれぞれ5、6回は行っていると思います。

私は高校を卒業した後にも訪ねまして：昭和52年の春だったと思います。その時は民宿に宿泊させていただいたんですけれど、祖父のことを知ってる方がそこにいらつしゃって、「采女さんのお孫さんかい？」なんて言われまして、食事も一品多く出していたりして良い思い出をさせてもらいました（笑）。

あと、平成5年くらいに行つた時もまだ祖父のことを知っているといる方がいらつしゃいました。「え、越野さんつてあの越野さん？」みたいな感じで。

生まれも育ちも東京の私達にとつては故郷と言えるところはないものですから…。もちろん本當の故郷ではないのですが、伺うたびに故郷の気分を味わわせていただいています。私達が今回訪れた時はあいにく天気あまりよろしくなくて曇つていたのですが、積丹の海はちよつ

とでも日が射すと本當に青く美しくして、シャコタンブルーと言われているって聞きましたけど本當に綺麗ですよ。

―何度も来町していただいと聞いて嬉しいです。

今は東京の地においてもフェイスブックで積丹町の様子が見られたり、道路だつて昔と比較するとしっかりと整備されて：何だか随分身近になつたな―と思います。フェイスブックは毎日拝見しますよ。

采女の故郷である美国を離れた東京の地で、その子孫が意志を継いでいることをお伝え出来たら嬉しく思います！

お二人ともご多忙にも関わらず、大変親身に取材に応じて下さいました。

明治の激動の時代の中にあつて、高い志と気概を抱き、小さな漁村から日本の首都へ若くして飛び込んだ采女さんの姿。それは今、采女さんの故郷と同じ積丹町に生ぎる私たちにとつても、勇気を授けてもらえるものに違いありません。

|| 取材・企画課 高橋野亜 ||

積丹町敬老会

～ 614 名の長寿と健康を祝福～

高齢者の方々の長寿と健康を祝う「積丹町敬老会」(鎌田淳史実行委員長)が9月18日、積丹町総合文化センターで華やかに開催されました。

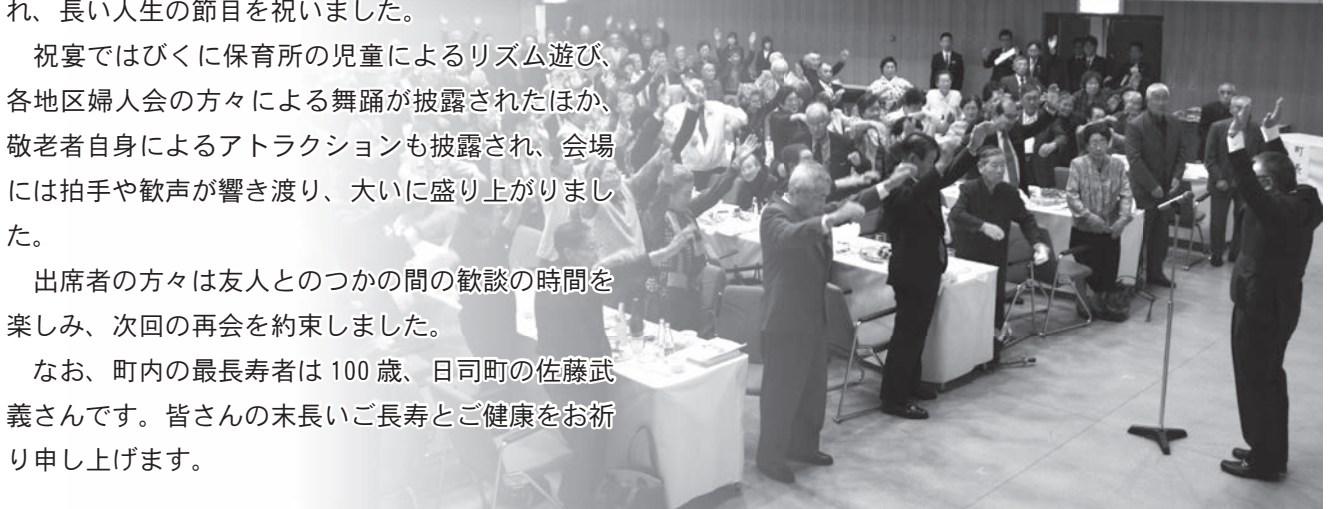
今年の敬老対象者は、昭和14年9月30日以前に生まれた75歳以上の方々。今回は新たに44名を加え、町全体では614人が対象者となり、この日は123名が参加しました。

当日は今年88歳の米寿を迎えられた25名のうち、出席された5名の方々に松井町長から祝品が手渡され、長い人生の節目を祝いました。

祝宴ではびくに保育所の児童によるリズム遊び、各地区婦人会の方々による舞踊が披露されたほか、敬老者自身によるアトラクションも披露され、会場には拍手や歓声が響き渡り、大いに盛り上がりました。

出席者の方々は友人とのつかの間の歓談の時間を楽しみ、次回の再会を約束しました。

なお、町内の最長寿者は100歳、日司町の佐藤武義さんです。皆さんの末長いご長寿とご健康をお祈り申し上げます。



9月3日、第40回目となる積丹町小学校陸上大会が開催され、町内4校の小学校の児童たちが短距離走、長距離走、走り幅跳び、ソフトボール投げの4種目で記録を競いました。
今回は川島海流人君(美国小・左下写真)が第4学年男子500m走で大会新記録となる1分49秒64を記録し、12年ぶりの同競技での記録更新を達成しました。
参加した児童たちは互いに声援を送ったり、記録を確認し合うなど、他校と切磋琢磨しながら交流を深め、今後の記録更新に意欲を高めていました。



第40回積丹町小学校陸上大会
川島海流人君(美小4年)
500m走1分49秒、12年ぶり新記録!